

『先真文明時代』への覚書

木俣美樹男

Memoranda on “Prehistory for Real Civilization”

Mikio KIMATA, Plants and People Museum, INCH

1. 先真文明時代

地球規模の気候変動、人口の爆発、資源・エネルギーの枯渇、全球化した商業主義、巨大国際企業、金融経済、過度の便利さ・欲望、職業の衰微・失業、生活の格差などなど、現代文明は生き物としての人間を否定するに至っている。

人間とその歴史を否定するような現代文明はいらない。近代に獲得された文化的進化である自由主義、民主主義、個人主義を損なうことには同意できない。人種・民族差別や宗教対立を克服しようとしてきた意志を萎えさせてはならない。

今世紀中に現代文明は、その文化的進化を定着させて、生き物の文明、新たな真文明へと徐々に変容（転換 Transition）せねばならない。現代文明の終焉の中で、新たな文明を準備する「先真文明時代」がある。今がその時である。

2. 科学の変節

科学は、個人の好奇心に導かれ、事物・事象の謎を解き、現象を明らかに説明する。だから科学は面白く、自己満足し、自足できる。このことは、芸術や哲学と何ら変わることなく、本質は個人の心の充足であり、成長でもある。

科学は事実に基づき、批判的精神によって、中世社会の蒙を啓いた。科学の発見を基に、科学を応用した技術が発達した。技術は産業を発展させ、人々の暮らしを便利にした。しかしその後、現代の巨大化し続けた産業は、世界に羽ばたき製品を世界に売りさばくようになった。産業は商品開発のため、いっそう技術の発達を

要求し、技術はそれに応えるために、科学を従わせるようになった。

個人の楽しみであった科学は、巨額な援助により巨大科学と称して産業に従属し、企業のものになった。人々は便利さに魅惑され、宣伝情報により欲望を限りなく募らせて、本来、個人の楽しみであった科学の面白さから離れて、産業に科学を売り渡してしまった。現代科学は悪しき似非宗教になり、数値は似非教義となり、人々は批判的精神を失い、猜疑心に満たされていった。

3. 遺伝子支配への不服従

『利己的遺伝子』（ドーキンス 1994）を初めて読んだとき、まえがきに「われわれは生存機械—遺伝子という名の利己的な分子を保存するべく盲目的にプログラムされたロボット機械なのだ。オーソドックスなネオダーウニズムの論理的な発展である。進化において重要なのは、個体ないし遺伝子の利益であり、種ないし集団の利益ではない」などとあった。

機械論や還元論の最たるものと考え、反感を先入させてしまった。有機体論や全体論の立場をとりたい私は、遺伝子 gene にすべてを支配されることを拒み、利己的遺伝子には不服従であることを思い決めた。ダーウィン主義そのものへの反感というより、今西錦司の影響を受けてきたので、変わるべくして変わる群淘汰にもひかれていたからである。

population を遺伝学では集団、生態学では個体群と訳すが、実際にも同義的ではないようだ。ドーキンスは、「進化において重要なのは、個

体（ないし遺伝子）の利益ではなくて、種（ないし集団）の利益」だというのは誤った仮定であり、「歯も爪も血まみれの自然」の中で自然淘汰を受け、「成功した遺伝子に期待される特質でもっとも重要なのは無情な利己主義である」と述べている。

悪意や敵意に満ちたこの絶望的な世界で、他者の悪意に対して憎しみを抱いたという私的経験によって、私の性善説は揺らいだ。それでも、不特定の人々に対しての善意や好意はあり得るのだろうか。どうしたら、善意や好意に基づく行為が醸成されるのだろうか。

このような過酷な文明の現状を憂え、真文明への過渡を考えるにあたって、『利己的遺伝子』を再読することにしたのである。ドーキンスは注意深く論を進めている。先入観を制御してよく読みなおすと、数多くの示唆に満ちていた。私は日本人として育ち、生きてきたとしても、欧米の近代市民社会の自由主義、民主主義、個人主義を信条としているので、この点からは、ドーキンスのダーウィン主義、個体（遺伝子）淘汰には論理の一貫性があると考えられる。

次に、さらに、少し長くはなるが、訳文の一部を要約的に引用しておきたい。

……常に非情な利己主義という遺伝子の法にもとづいた人間社会というものは、生きていくうえで大変いやな社会であるにちがいない。それが真実であることに変わりはない。我々が利己的に生まれついているからこそ、われわれは寛大さと利他主義を教えることを試みてみようではないか。遺伝子の意図をくつがえすチャンス、すなわち他の種にさきがけて望んだことのないものをつかめるかもしれないのだから。われわれはかならずしも一生涯、遺伝子に従うよう強制されているわけではない。あらゆる動物の中でただ一つ、人間は文化によって、すなわち学習され、伝承された影響によって、支配されている。

……遺伝子は人体を作りあげていくのを間接的に支配しており、そしてその影響は厳密

に一方通行である。すなわち獲得形質は遺伝しない。生涯にどれほど多くの知識や知恵を得ようとも、遺伝的な手だてによってはその一つたりとも子供たちには伝わらない。人間をめぐる特異性は、「文化」という一つの言葉にほぼ要約できる。基本的には保守的でありながら、ある種の進化を生じうる点で、文化的伝達は遺伝的伝達と類似している。新登場の自己複製子にも名前が必要だ。文化伝達の単位、あるいは模倣の単位という概念を伝える名詞である【ミーム meme】。

……私欲のない利他主義は、自然界には安住の地のない、そして世界の全史を通じて存在したためしのないものである。しかし、われわれには、この支配者にはむかう力がある。この地上で、唯一われわれだけが、利己的な自己複製子たち【gene と meme】の専制支配に反逆できるのである。

さて、ドーキンスが言うように、われわれは利己的な複製子たちを制御して、この社会で真に利他的な善意と好意をもって、自律的な人生を過ごすことができるのだろうか。

現在、欧米の市民社会でさえも、民族や宗教などの違いによる猜疑心という「恐竜」および、さらに恐ろしく利己的な「大怪獣」である「産業技術と金融経済」とらわれている。つまり、民族や宗教も重要な文化、利己的な複製子 meme であり、神のもとに「利他性」を自律制御できず、「利己性」とらわれすぎれば、絶えざる民族間と宗教間の紛争、人々の日々の暮らしを食らう「恐竜」になってしまう。

他方で、多様な meme である産業技術と金融経済は、グローバル化、商業化によって「大怪獣」を育ててしまった。政治は現実の駆け引きであり、利己性がむき出しになるが、優れて洗練された政治は利他性による双方の妥協、共存、共生にある。生き物たちが日々の営みに戻れるように、真文明を構築するために、市民、個人は歴史を学び、未来を良くする構想をよく話し合い、描いていく必要がある。

4. 現代の野蛮の事例

「科学主義の独裁と文化の危機」という副題で、アンリは『野蛮』(1987)を書いて、科学memeが巨大化した現代科学による野蛮な状況を警告している。まずは論点を要約しておこう。

……科学の爆発と人間の破滅。これこそ新しい野蛮であり、その克服が可能かどうか、今度ばかりは定かではない。野蛮は始まりなのではない。野蛮は、ひとつの貧困化、あるいは一つの退廃として現れうる。すべての文化は生の文化である。文化とは生の自己変革、それによって生がより高い実現と成就の段階へと達するために、あるいは自ら成長していくために、絶えず自己自身を変革していく運動を意味する。精神の世界が、その法則やそれ自体の創造とともに、自然のうえに、あるいは人間や動物の身体性のうえに安らうものであるように思われれば思われるほど、この自然は抽象的諸観念によって作り上げられた科学の世界とはまったく異なるものだ、ということがわかる。科学は文化と何の関わりも持たない。それゆえ、科学の発展は文化の発展となんの関係もない。極言すれば、科学的知が異常に発達した結果、その過程の終局には文化そのものの滅亡もありうる。恐ろしい野蛮が出現し、今日、人類を死に追い込もうとしているのである。

……本質的には美的である世界が、美の命じるところに従わなくなるのである。そして、このような状況が、まさに科学の野蛮である。感受性においては、すべては一なるものとして存在する。この場合、一ということが意味するのは統一のことであり、したがって他のすべてのものとの関係のことである。技術とは、科学と科学に固有の理論の知によって可能となる操作や加工の総体のことである。しかし不幸にも、技術であれ科学であれ、それらはそういう人類の優れた利益についてはまったく何も知りえないのであり、そういうものを顧みることすらないのである。現代技術のこの怪物のごとき発展のただなかに、さ

らにまた新たな手口—原子核分裂や遺伝子操作などの技術—が登場し、科学者の良心に問題を提起するようなことがあったとしても、この問題はともすると時代錯誤だとして一笑に付されてしまうだろう。なぜならば、科学にとって存在する唯一の实在においては、問題も良心もないからである。

……野蛮が社会全体を徐々に腐らせているために、本来の概念に合致する大学が長らえることがまったく不可能になっているような社会においては、同じ原理が同じひとつの社会のいたるところで働いている。大学の目的は、教育において知を伝達し、研究においてそれを増し加えることである。社会と大学は互いに異なる二つの本質であるばかりではなく、全く異質で相容れず、全面的に衝突し、永遠に戦うしかないような闘争である。この野蛮によって始まるような社会においては、もし大学が教育や修練や研究の場として、生の自己発展と自己成長の諸過程の全体を総合するものであるとするならば、そういう大学にとっての場所などどこにもない。

この要約的引用から、私はアンリに共感することがとても多い。欧米人であれ、私たちと同様に、公正に現代の状況を観察して、正直に記述している人々がいる。科学知への過剰な信仰が、多くの野蛮を生んできたこと、薬害、公害(化学物質、放射線、排気ガスなど)、遺伝子組み換え、無人兵器、仮想現実などなど、すでに限りがないし、さらに大怪獣による被害は増大することであろう。それなのに、大学が無力に等しいばかりか、むしろ野蛮に手を貸していることに、私も絶望していたのである。

大学紛争に参加した学生として、大学人として人生をかけて抵抗の努力をした。しかし、いかほどの成果をも示すことはできなかったが、生きている限りは、まだ希望を示すように試みたい。絶望のかなたにこそ、新たな文明を準備するために、生の限り努力を傾けている大学人は少なからずおり、彼らから励まされているからである。

産業技術による便利さに心身をゆだねて、思考を停止してはいけない。自由に学ぶことから逃げてはいけない。そうしなければ、利己的な複製子たちに支配され、他者を思いやるという教養が身につかない。教養を高めるように努めないと、私たちは野蛮に陥る。

誠実な大学人として水俣病の調査研究に人生を過ごした原田（1972、2006）もその一人で、彼に対しては強い畏敬の念をもってきた。私は大学院生のころ、水俣病患者の支援のための大学行動委員会に加わっていたからでもある。原田（1972）は正直な心情を吐露し、次のように書いている。

……私たちの医学が、人間を、ひとつの動くあるいは労働する機械としてみてきた、いかえれば人間＝労働力としてみてきた歴史のせいであろう。こうした人間観を、医学者自身が変革しなくてはならないのではないか。この考えは、現在あるいは十分に支持されないかもしれないが、水俣病裁判の中で、そのような主張をした人間がいたことは歴史にささやかに残ると思う。

……これは病気ではない。殺人です。犯罪です。とでも叫びたくなるような衝動に何回もかられたが、やるせない怒りをどこかで冷却しなければならなかった。冷静さを失い、感情的になることが、医師としての公正さを欠くとみなされることを恐れた。しかし、このような場合、一体医師としては怒ることも許されないのであろうか。患者と一緒に怒ったり、泣いたりすることが学者として失格であるなら、学者でなくなつていいとさえ思った。

……水俣病の実験的研究はしても、臨床的研究には手を出すなという教訓が医学部の中では公然といわれ、臨床的研究は、あれは研究ではなく社会運動か県庁のする仕事だともいわれている。しかし、学園紛争の中で、大学が地域社会から遊離していることを反省したのは、口先だけのことにすぎなかったのか。

……水俣病は人類が経験した環境汚染とし

ては史上最初にして最大級のものであるが、放射能汚染もまた、汚染のメカニズム、規模においては異なるが、人類が初めて経験した巨大な環境汚染とっていい。この人類初の巨大な環境汚染の結末こそ人類の未来を象徴する。そして、その結末、人類の未来は私たち現代に生きるものの手にゆだねられている。

市民の直感であれ、研究者の直観であれ、新たな産業技術に対して危険を察知するのなら、保留すべきである。危険であるというデータがないから安全であり、進めてよいということにはならない。データがないなら保留するということが科学的態度であろう。たとえば、科学者が遺伝子操作の安全性の検討のために、自発的な実験中止（モラトリアム、1974年）を行ったのはよい事例である。

保留は危険に対して予防的に働く、統合知の態度であり、実に科学的態度にも合致するのではないのか。安全性の観点から予防するのでなければ、他方で、科学はいつも災害の後追いになる。危険が現実になって、データが取れて、それを考察すれば科学的というのなら、あまりに非知的、退行的ではないのか。これが水俣病の被害を拡大したし、現在は福島放射線被害を拡大する恐れがある。

絶望の暗闇の中で、希望の微光を探る努力をした原田（2006）は、水俣病に関わった40余年の総括と現場からの学問の捉え直しとして、後に続く若い人へのメッセージとして、「水俣学」を提唱した。

「地域の大学として地域の問題を真正面に据えて、どう研究し、教育し、伝承し、地域にどう還元していくかという試みの一つである。……環境汚染の最大の被害者は自然の中に自然と共に生活している人々、自然に対する依存度が高い人々である。彼らはしばしば少数派であり、社会的にも弱い立場の人々である」。

さらに付け加えて、原田（2006）は、「水俣病の原因究明の過程で、残念ながら、多くの在京の高名な学者たちがさまざまな異論、反論を

出して企業を支援したが、学問は誰のためにするのか、研究者の倫理を問いたい。唯一、実態と事実は現場にしかない。したがって、現場を大切に、現場から学ぶ学問を目指す。ローカルな問題を真摯に取り組んでくると、それは必ずグローバルな問題に連結している」と述べている。

なぜ、私たちは水俣病の苦難から学ぼうとしないのか。現在、福島原子力発電所崩壊による公害が、水俣病の被害が拡大するのと同じ経過をたどりつつあるように、私には思えてならない。企業は被害状況の事実を隠し、状況が悪化して隠しきれなくなると、後出して公表する。中央・地方行政も、責任を明確にとらない。そうこうしているうちに、公害の被害は拡大するばかりだ。

現地の実態と事実の認識から始めないと、問題解決には進めない。福島県東部周辺の住民の苦難を少しでも早く軽減するために、中央・地方行政は今からでも東京オリンピックの開催を辞退し、被災住民の生活保障を第一にし、優先的に行政策予算を投入して、人為・自然災害の復興に邁進すべきだ。とりわけ福島原子力発電所崩壊に関わる放射性物質への対応策が緊急な課題である。

このように、私がなすべきことは、利己的な複製子たちに自律制御を加えて、正直な見解を述べることである。

西村(2006)は、原田(2006)とは異なる視点から、「科学者から見た水俣病研究：自然科学者と文化系との間の深い溝」について、次のように論じている。

……文科系の学問と自然科学の間には同じ日本語を使いながら、まったく理解不能に近い溝がある。つまり文科系学問と自然科学は、相互にほとんど理解不能な二つの文化と見なしてよいのかもしれない。実体知識は自分で体を動かして作業し、体に刻みつけなければ得られないものであって、書齋人にはないものだ。科学者がスコラ学者と違う点は、書齋

人でありながら手職人でもある点である。科学の特長は議論が定量的であることだ。そのため議論は議論の核心は数学記号を用いた計算とその結果をあらわすグラフになる。これに実体を表現する写真や略図が科学情報の主部である。言葉はこれを説明するための補助手段である。科学者とは意見の違いでの論争を好まない人種である。結局、科学の精神は一切の神の否定に帰結せざるを得ない。ここに科学が敵視される深い根拠がある。神をもつ人にとっては、神への帰依、献身、原罪意識が倫理になるが、神を否定する科学者にとっては、これらすべてを否定することが倫理になる。倫理性の最後の証は、どれだけ自分の生命を、職を、生活を危険にさらしたかだ。絶対安全な発言は言論としての倫理性はゼロである。大学などある程度安定した地位において社会問題と歴史を研究できる者が、身の危険ばかりを恐れるあまり、一番やらなければならない研究をまったく放棄していたのでは、倫理性が問われる。

西村(2006)の科学論は、自然科学者の立場としては、まったく怜悯で、単純明快である。しかし、彼の信じる科学は本来の科学であって、私も自然科学者としてここまではおおよそ同意する。しかし、現代の科学は、本来の科学とは大きな違いがあり、技術、産業、さらに金融と強く結びつき、少しもファンタジーが入り込む要素はない。冷酷な現実を仮想の衣装で覆い隠しているようなものである。

また、彼は文科系の水俣病研究者を、患者を神聖視しているのではないかと強く批判している。その根拠は、1) 水俣以上の惨劇が第2次世界大戦中にいくつも起こった、2) 水俣病は二度と起こらないので、思考をステレオタイプにすることを避けたい、3) 患者・研究対象の神格化が、研究者自身の神格化に通じ、研究者の倫理感覚を鈍らせる、である。

このように要約の前段と後段では明らかに論調が違う。後段における論調は一変して感情的になり、現実の倫理性の問題に焦点化され

る。彼の倫理性についての義憤は、第2次世界大戦に伴う惨事、とりわけ彼自身がこうむった満州での辛い経験、しかし、戦争責任者は敗戦後に何ら責任を取らなかったこと。さらに、水俣病と自動車排ガス研究をしたがために他大学に追われそうになり、水俣病研究を中止するという条件で追放を免れたことなどによるものである。怜悯な自然科学者であるはずが、彼自身の個人史をよみがえらせしまい、その義憤が人間味を帯びて正直に、はからずも吐露されてしまったようだ。

か弱い一研究者が倫理性を意識し、良心を貫くのは、自ら観察した事実に基づき、論理を組み立てて、自説を論じることにある。利己性を越えて事実を明かすことは利他的・博愛的な行為であり、事と次第によっては「焚書坑儒」の目に遭う遭う。現代市民社会における文化的進化の成果である自由主義、民主主義、個人主義にあって、暗殺されないまでも、社会的に黙殺されることは往々にしてある。

私は、黙殺までは忍耐するが、生命や生活をかけてまで抵抗するつもりはない。日本の場合、これまでの歴史を見てくると、同僚など身近な人たちによって、まず黙殺され、排除される。大学組織でさえも同じく保身的である。市民が自ら学び、自ら社会を動かそうとしない限り、つまり市民が個人として行為の判断をしない限り、私は大衆的な選択に迎合はせず、その裏切りの犠牲になる気はない。自由を失うという、閾値を超えて辛い状況になる前に、私は生き物として身を守るために「三猿」になるつもりだ。このような社会状況が訪れないように、今こそ、学び、考え、発言をしているのである。

5. 素のままの美しい暮らし

重い義務と責任を伴う大学教授という職業を定年退職して、いわゆる無職になった。給料がないということがすなわち無職ということである。この歳まで、土曜日曜も働き、年休もほとんどとらなかった。自然科学者としてのトレーニングを受け、自らピペットを握り、実験研究も定年退職の年月日が迫るまで継続してきた。

環境教育学を創業するために、専門家から教養人になるようにも務めてきた。義務仕事を越えて、人の倍以上は働いてきたので、若者の職をいつまでも奪わないで、これからは年金生活者としてつつましく暮らしてよいと考えている。

そうはいつでも、もともと研究を趣味ととらえてきたので、職業教授でなくなっても、生涯、研究という仕事はなくなるならない。長年続けてきたボランティア仕事もやめない。やっと、自分と家族のために、日常を暮らす家事や自給農耕を取り戻したのである。「素のままの美しい暮らし (sobibo)」に近づくことができそうである。多数買い込んだ読みたい本も、心おきなく読むことができる。

素のままの美しい暮らし (sobibo) を提唱してきたが、『素朴への回帰 一国から「くに」へ』（河原 2000）には、私ととても近い考え方が一層丁寧に描かれていて、多くの示唆を得ることができる。特に、国と「くに」のありかたを複眼で見て、国（中央）と「くに（地方）」における行政政策が俯瞰的に立案されるよう望んできた。何もかも単眼、単線的な行政政策ではなく、多様な手法が同時にとられてよい。「くに」の自律的な行政政策が、国の俯瞰的行政政策の中に位置づけられていてよい。

私の行政政策の師、高木文雄はそう考えて、「森とむらの会」を創ったのだと思う。森とむらの会では、私的な利害にとらわれない、大所高所からの行政政策提言をしてきた。私は教養人になるために、高木の弟子として、実践的に行政政策の立案資料づくりのための調査研究に携わってきた。このため、多くの官僚や政治家とも知遇を得る機会があった。

さて、要約的引用をまずしておこう。日本の政治思想史を専攻した河原（2000）は次のように記述している。

……彫琢して朴に復える（莊子、應帝王篇第七）。現代人は物的、精神的にすきまなく人為、虚構、人工の環境にとりまかれ、時に天然、自然の生活に憧れても、もはや帰るべき道すら探しあぐねているのではないのか。

現代教育が想定した期待される人間像がある。科学的で、合理的で、何よりも権威が正しいとする解答に従順に適応するような人間像である。知識の習得【本当は単に伝達に過ぎない：著者注】を至上のものとする現代教育は、このような素朴さ、生きた実感を嫌って、極力それを排除しようとする。ここには、ひたすら精密な彫琢を事とし、素朴を評価しない現代文明のあり方が浮き彫りにされていた。

……阪神淡路大震災の時に、神戸市で、犬たちは大阪方面に逃げたが、人間は神戸市の中心部へと逃げた。人間が危険な方に吸い寄せられていったのは、人工的環境と技術的構成物に囲まれて暮らしているうちに、本能的、直観的な判断力を退化させたのであろう。アトランタ・オリンピック以降の露骨な商業主義は健全な身体も精神も壊している。

……素朴への回帰は、身近な所での願望や希求に支えられている。現代人はどこかで現代世界を支配する彫琢への限りない定向進化の趨勢に歯止めをかけ、朴に復る道を探らなければならない。素朴と洗練は一見あい反するように見えて、しかし両者はあいまって一つの文化の構成要素となる。

……シラーが素朴に与えた定義は、自然であること、自由であることであった。ルソーのみならず一切の学問や思想は、素朴への情熱を欠いては未来に生きるものとならない。それにしても現代の極限にまで達した技術至上主義文明は、あえて無理を承知で革命だの素朴への回帰などを掲げなければならないところに至っている。活力とは道義的な自己抑制力であるが、意地・気概・反骨・覇気の類が消滅してゆくことは活力低下の初歩的徴候である。

……科学・技術への絶大な信頼の念は、利便・快適・有用性についての信頼であり、科学のみが人間を神に近づけてゆくことができるからである。人間は果たして神になりうるのか。

河原（2000）は以上の本文に、新しい「くに」

への誘いを付記している。要約しておこう。

……人口2、3万人程度の小さいくに（共和国）。新しい人間は知情意の三要素の統合体として存在し、単純・素朴を身にしみて生かす。天職は神のため天のため、万人のために奉仕する仕事である。食糧不足・栄養不良の問題は豊かな国の援助、人々の利他心や同情で解決できない。食糧危機や環境破壊もバイオテクノロジーによって解決するというのは見事な科学・技術信仰に他ならない。第2次世界大戦後、自国の農業を痛めつけてきた日本で、農業への回帰が一種の理想と見なされている。農業という言葉はもはや止揚して、生きていくための生業としてとらえる。食糧は万人に必要であるので、共働を基本とした地業として誰もが農園に関わる。素朴さ、特に児童の発育と教育にとっての素朴な環境は守らなければならない。ゲーテ最後の結論は「自由な土地に自由な民の住むのが見たい」であった。人々が協力して働くところに自由がある。将来のくにについての形はほとんど示されていない。この未来図を考えることは、人に自己の宇宙観・世界観・歴史観・人生観のすべてを動員することを求める。

……くに（「扶桑國」）は日本国の領域内の見捨てられた過疎地域に樹立、「和を以て貴しとなす」、「政道無私」、「萬人直耕」、一職二人制・月番交代制、ワークシェアリング方式、専守防衛・65歳以上徴兵制、鎖国の権利」などの提案がなされている。ここで言う「鎖国はグローバリゼーションの中で自国が倫理的に許容できないものを選択し拒否する意思のことである」。

私は国立大学に職を得ていたものとして、単に一教授で、しかも民族植物学者であったにすぎないのだが、国（国民）ないし「くに（市民）」のあり方について、調査研究し、考え、ささやかな提言はしてきた。全球化した現代の中で、地域主義や自治を求める河原（2006）の提言に対して共感するところは多い。

しかしながら、国際社会の政治や経済の過酷さ、ヨーロッパでさえも野蛮な戦争をいまだに悪意をもって作り出していることを見るにつけて、残念ながら、「くに」は国とのかかわりを維持して構想せざるを得ないと考える。国の助成にできる限り頼らず、地域自治に気概を持って、自律内発的に発展させることは現実に可能なことではないのか。エコミュージアムやトランジション・タウンの活動はまさにこれである。「改革」はその場限り、犠牲の多かった「前の革命」ではなく、しかし、実のある「次の革命」は志を保って、ゆっくり準備しながら、天の時の到来を待つことに賛成である。専守防衛・65歳以上徴兵制は、『風の谷のナウシカ』に従軍した老兵たちの気概に示されている。

TPP（環太平洋連携協定）に強く反対している論客、鈴木宣弘（2014）も、講演で「今だけ、金だけ、自分だけを行動原理にするのではなく、組織のリーダーは残された生涯の時間を、我が身を犠牲にする気概を持って、全責任を背負う覚悟を明確に表明し、実行すべきではないのか。責任回避と保身ばかりを考え、見返りを求めて生きていく人生に意味はあるのか」と同様の趣旨を述べている。

身を守ることは基本的な生活技能ではあるが、他者を傷つけてまで保身しかないのは悲しい。利己的複製子たちに支配され、自律的な人生を生きているとは言えない。保身と保守は明確に異なる。私はあえて言うなら、原日本人志向の保守底流である。だから、「くに」を持続可能な地域社会として再生したい。

第2次世界大戦に伴う惨事、とりわけ彼自らがこうむった満州での辛い経験、しかし、戦争責任者は敗戦後に何ら責任を取らず、そのまま高い地位にしがみついたことに対する著しい義憤（西村2006）、要するに、為政者は現代史を語らず、責任を曖昧に回避し、他方、市民は自ら学ぼうとせず、知らないことにして、両者ともに事実に基づく責任措置を先送りしてきたことで、被害者は黙殺され、将来に再び同じ過ちを繰り返させる。次には、自分が被害者になっているに違いない。

第2次世界大戦後、南アジアでも植民地の独立に際して、悲惨な争いが起こった。1945年8月15日の日本の敗戦に関わって、その2年後、英領インドは1947年8月15日に独立した。この時期を前後して、インド・パキスタンの分割時の惨劇は目を覆いたいほどのことで、突然引かれた新国境を挟んで約200万人が殺されたと推定されている。『インド現代史1947 - 2007』（グハ2007）に詳細な分析がある。植民地支配の残滓、宗教・民族・カーストやイデオロギー間の対立、大国の思惑などが複雑に絡み合っ、インド・パキスタンの分割、さらにはバングラディッシュ分離、チベットの併合（約120万人が死亡）などへと展開していった。

政治は非情である。モーハンダース・カラムチャンド・ガンディーやジャワーハルラール・ネルーが人々の犠牲を避けようとした優れた政治家であっても、毛沢東や周恩来はにこやかな笑顔に隠れた老練な政治家であった。旧東欧、ウクライナ、中東、パレスティナ、チベット、新疆ウイグル、アフリカ各地などでは、断続的に戦争が今現在も起こっている。人類の文化的進化は、まだ、紛争の話し合い解決の手法を十分に確立できていない。人ひとりの命の重さを考えれば、数百万人という死者数は想像さえつかない現実である。

現代史は評価が確定しないから学ばない、および伝えないというのは、無知により同じ不幸な結末をもたらす。現代を個人の視点で学び、考えればよい。個人や事象の歴史的評価は誰による評価なのか。権力を獲得した者たちの評価（正史）なのか、市民の実態評価（個人史）なのか。正史はあまりにご都合主義の一方的な歴史評価なのではないのか。これを西村（2006）は、怒っているのである。

第2次世界大戦をめぐる日本の現代史も、これに関わるインドの悲惨な現代史から、多くのことが学び取れる。当時の日本軍は、チャンドラ・ボースと協力して、英領インドを開放するとの名目で、インパール作戦などを行った。これらから学びとらなければ、新たな悲惨を伴う現代史を、幸せな解決へと導く手立ては見出せ

ない。日々、世知辛い現実を見れば、利己的な複製子は利他的な行為に優位であり、生存する確率が高いと考えられる。しかし、利己と利己は衝突せずにはいられず、常に闘争に明け暮れることになる。世界の悲慘に伴う憎悪の連鎖、利己的な複製子たちの自縄自縛から逃れることができない。

6. おわりに

環境学との位置関係において、現代科学の現状を深く反省してみよう。現代文明が危険な崖淵、退化の閾値を超えたからには、今、心して背水の陣で行動を起さねばならない。ただし、決して急ぐことなく、早く始めて、ゆっくり着実に確認しながら、良い方向に変えていくのである。

利己的複製子たちに逆らい、共存・共生への文化的進化をさらに促していこう。利己的な悪意、過剰な金銭、権力や名声への欲望などを自ら制御して、自律して善意を志そう。美しい自然の景色、美しい絵画の色使い、音楽の旋律、人は善意に対して他者から善意で応答されて大きな喜びを見いだす。現代を、生き物の文明＝真文明へのトランジションの時代ととらえよう。素のままの美しい暮らしに復るためには、山村の伝統的な生活技能を学ぶとよい。

私たちが帰るべき道は、まだ、今なら見つかる。自然や歴史、芸術や思想、伝統的知識から人生を自分で学び、考え、選びさえすればよいのである。

引用文献

- ドーキンス, R. 1989、日高敏隆・岸由二・羽田節子・垂水雄二訳 1991、『利己的遺伝子—増補改題「生物＝生存機械論」』、紀伊国屋書店、東京、548pp.
 グハ, R. 2007、佐藤宏訳 2012、『インド現代史 1947 - 2007 上巻』、明石書店、東京、643pp.
 原田正純 2006、「水俣病五〇年の負の遺産と水俣学」、環—歴史・環境・文明 25 : 273 - 284、藤原書店、東京。
 原田正純 1972、『水俣病』、岩波書店、東京、244pp.
 アンリ, M. 1987、山形順洋・望月太郎訳 1990、『野蛮—科学主義の独裁と文化の危機』、法政大学出版局、東京、284pp.
 河原宏 2000、『素朴への回帰—国から「くに」へ』、人文書院、京都、219pp.

西村肇 2006、「科学者から見た水俣病研究：自然科学者と文化系との間の深い溝」、環—歴史・環境・文明 25 : 254 - 271、藤原書店、東京。

鈴木宣弘 2014、「日本農業を取り巻く国際情勢—TPP、日中韓 FTA と 6 次産業化」、講演要旨、東京大学、24pp.